

調査報告

対馬における観光施設の案内板の韓国語解説文の 現状と課題

長谷川 由起子

キーワード：対馬、インバウンド、多言語解説、韓国語、対日理解

要 旨

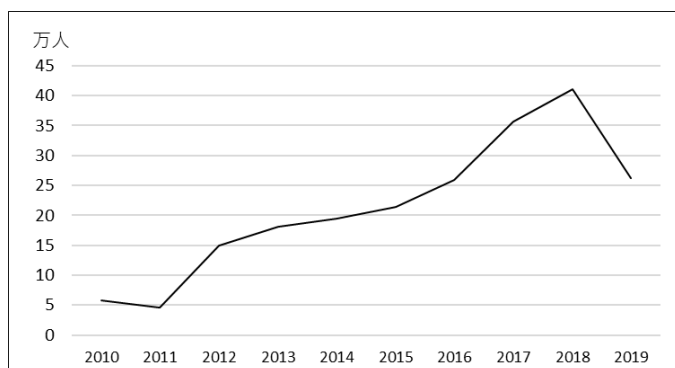
対馬は韓国人にとって、最も近く、安価で気軽に往来できる外国である。対馬にとっても朝鮮半島は太古より切っても切れないと言ってよいほど歴史的関りが深い。その地理的・歴史的条件ゆえに韓国との関係において明るい面と暗い面を併せ持つのも事実であり、それが対馬ならではの強みでもある。インバウンド観光振興の目的のひとつに対日理解の促進が挙げられるが、その点で韓国人に向けて対馬の果たす役割は大きいと言える。本稿は、韓国人の対日理解促進の一翼を担う対馬の観光現場において、各施設に設置された多言語解説案内板の設置状況と韓国語文の内容を調査し、課題と改善策を検討するものである。

1. はじめに

21 世紀に入り、長崎県の対馬は、韓国人にとって最も近く、安く気軽に往来できる外国として、その人気が急速に高まった。2000 年に韓国・釜山港と対馬南部の厳原港との間に定期航路が開設されて以来、韓国からのインバウンドが本格化（助重 2007: 94）したが、2012 年には船会社が 3 社になり、大型船も就航したことで往復 3 千円という格安ツアーも登場し（岩下他 2014: 10）、韓国人にとって対馬はさらに身近になった。また、近年、SNS など個人発信のインターネット情報による人気が拡大し、2010 年ごろには 5 万人前後だった韓国からの来島者が、過去最高だった 2018 年には、その 8 倍にあたる 40 万人を超えた。

しかし、2019 年夏以降、日韓関係の悪化によって訪日韓国人客数自体が大幅に落ち込み、インバウンド客の 99%以上を韓国人が占めていた対馬は大打撃を被った。これを機に、「韓国インバウンド一辺倒の弊害が一気に吹き出した」（ながさき地域政策研究所 2019）との反省

第1図 厳原港・比田勝港から入国した韓国人数の推移



が生まれ、インバウンドの多元化、国内客の誘致に取り組んでいたが、そんな矢先だった2020年、「コロナ禍」に見舞われたのである。2020年9月現在は、GoToキャンペーン等を活用した国内観光活性化策により観光経済の回復・再生が進みつつある。

ただ、今後「コロナ事態」収束を迎えた暁には、国際観光が近隣国から始まるであろうことを考えると、韓国からの対馬来島者は再び増加することが予想される。

韓国人が対馬を訪れる動機は何と言っても「近さ」「安さ」であるが、自然景観の美しさと、韓国との歴史的関係の深い見どころが数多くある点も韓国人を引き付ける要素である（中村2014: 36）。受入れ側の対馬としては、経済効果を期待するだけでなく、この機会をとらえて国際観光振興の一つの目的でもある対日理解の増進にも取り組むべきであろう。外交問題に関しては地方の観光現場にはなすすべもないが、ありのままの日本を理解してもらうことは現場でこそ可能だ。外交関係や内外の事象に翻弄されることの多い国際観光ではあるが、外国人が直接日本の現場を訪れ、感じたり気づいたりできる機会を提供することこそが、国際観光の果たしうる貢献だと言えよう。

本稿は、対馬ならではの強みを生かして韓国人の対日理解を深めるため、これを支える観光現場における多言語対応としての韓国語、具体的には観光施設の韓国語解説案内板の現状を点検し、課題と改善策を考察するものである。

2. 先行研究

近年、街中や観光施設に設置された案内板は、街の景観の一部として「言語景観」という概念でとらえられ、研究分野として定着してきた。言語景観の主な研究には、文字種の分布について調査・考察したもの（染谷2009）、言語種分布の変遷と社会のありようとの関わりを論じたもの（庄司2009、井上2009、金2009）、言語景観と行政の関係（バックハウス2009）、表記に関する問題や注意書きのあり方（本田ほか2017）などに関する考察がある。植田（2017）、李炫

延(2019)は主に韓国語の標識の表記や訳語の問題に焦点を当てている。本田ほか(2017)は日本語から英語への誤訳や日英両言語の表現上の習慣の違いに注目しているが、韓国語については翻訳文の内容を検討した研究はいまだなされていない。

上述のように韓国人観光客が増加の一途をたどるこの20年の間、対馬市等の行政による観光施策のもと、日韓の2言語または日英韓の3言語、まれに日英韓中の4言語による案内板が島内各地に設置され、個々の受け入れ現場の必要に応じて、さまざまな対応が行われてきた。その結果、島内の主な観光施設、公共施設等にはほぼもれなく多言語案内板が設置されている。しかも、「観光地の紹介文は日本文の内容をそのまま各国語に訳して外国人旅行者にも日本人旅行者と同じ情報量を提供できるよう配慮」(助重2007: 97-98)されているという。

しかし、多言語案内板は「同じ情報量を提供」していれば十分だと言えるだろうか。観光庁(2014: 22-23)は、多言語による解説文制作にあたり、読み手である外国人の立場に立つこと、対象となる事物に関する背景知識や興味・関心が日本人とは異なることを踏まえること、情報の過不足を整えた解説文を提供することが肝要であり、日本人向けの日本語の解説文をそのまま翻訳したのでは不十分だとしている。韓国と日本の間の歴史的、文化的つながりの深さを考慮すると、韓国語の場合、他の言語とは異なった意味で、読み手の背景知識、文化習慣等を考慮し、情報の示し方を見極める必要があると考える。本稿は、このような視点から、韓国人観光客を受け入れる対馬の主要観光施設における観光案内板の課題を考察し、解決策を探るための基礎段階として、その現状を把握し、概要を報告するものである。

3. 対馬の観光施設における解説案内板の現状

筆者は2018年8月から2020年9月の間に5回対馬を訪れ、韓国人旅行者がよく訪れることで知られる観光施設¹⁾、または韓国と縁のある場所を巡り、その解説案内板の設置状況と解説内容を写真に収めた。対象とする観光施設・場所は以下のとおりである²⁾。

厳原地区(対馬南部)

- ①対馬藩主宗家墓所(万松院) ②金石城跡 ③旧金石城庭園
- ④清水山城 ⑤対馬藩お船江跡 ⑥修善寺 ⑦八幡宮神社
- ⑧長寿院 ⑨上見坂公園

対馬中部

⑩万関橋 ⑪烏帽子岳展望所

⑫和多都美神社

比田勝地区（対馬北部）

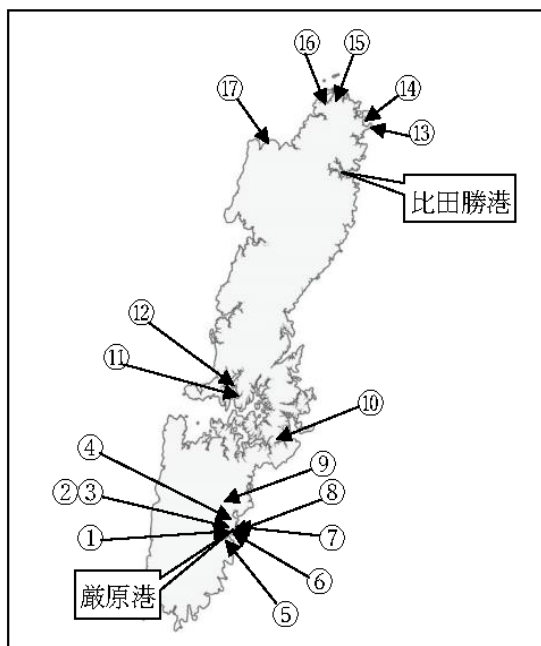
⑬殿崎 ⑭三宇田浜海水浴場

⑮韓国展望所 ⑯豊砲台跡

⑰異国の見える丘

これらの施設およびその周辺で撮影収集した関連する解説案内板は、およそ設置時期に並行していくつかのタイプに分けられる。特に、韓国語にも日本語同様、表記法に縦書きと横書きの別、文体に常体と敬体があるが、その組み合わせが観光施策のトレンドを反映していると

思われるため、タイプ分けの基準とする。なお、観光施設の解説案内ではないが、観光施設に隣接して多言語による注意書き看板がある場合も情報として添える。



第2図 対馬全図と調査対象施設の位置

- [1] 日本語（縦書き・常体）のみ
- [2] 日本語（縦書き・常体）＋韓国語（縦書き・常体）
- [3] 日本語（縦書き・常体）＋英語＋韓国語（横書き・常体）
- [4] 日本語（縦書き・常体）＋英語
- [5] 日本語（横書き・敬体）＋韓国語（横書き・敬体）＋英語
- [6] 日本語（横書き・敬体）＋韓国語（横書き・敬体）＋英語＋中国語

上記の観光施設・場所で撮影収集した案内板の数は以下のとおりである。

とした専門的な内容であることが多く、他言語への翻訳の困難さはもちろん、多くの日本人にとっても理解しづらいと思われる内容である。

そのため、要点を絞ってわかりやすく多言語で解説した案内板が、近年併設されていることが多い。ただし、多言語案内板が設置されているのは市の観光行政が対応できる範囲に限られ、文化財や社寺が個人所有である場合は個々で異なっている。

[2] 日本語（縦書き・常体）＋韓国語（縦書き・常体）：顕彰碑

1980年代から日韓の友好促進を目指す民間団体や日韓の関係有志によって建立されてきた顕彰碑に、花崗岩などに解説文が彫られた石碑が添えられている。②に設置された「李王家宗伯爵家御結婚奉祝記念碑」、⑥の「大韓人崔益鉉先生殉国之碑」、⑮の「朝鮮国訳官使殉難の碑」はいずれも朝鮮半島出身の歴史的人物に関わる碑³⁾であるため、解説文が日韓両言語で書かれている。韓国語は漢字混じりの縦書き文であり、両言語とも格調高い筆致である。もともと一般の韓国人観光客を意識したわけではなかったようだが、実際には韓国人観光客の多くがこれらを目的に観光施設を訪れている（松原2014: 6）。

なお、②には「雨森芳洲先生顕彰碑」が、⑭には「日本海海戦記念碑」があり、その脇に解説文の刻まれた石碑があるが、いずれも日本語のみである。上と同様に地元有志団体が建立したものであるが、建立当時は多言語で記す必要性を感じなかったのであろう。



第4図 「朝鮮国訳官使殉難之碑」と、左手前が日韓両言語で解説した石碑（⑮）

[3] 日本語（縦書き・常体）＋英語＋韓国語（横書き・常体）

2000 年頃から
来島し始めた韓
国人観光客を意
識したものと考
えられ、対馬市教
育委員会の記名
がある。なお、⑦
⑧にも形状のよ
く似た対馬市教
育委員会名の案
内板があるが、日
本語のみで書
かれている。



第5図 対馬藩主宗家墓所 ①前に設置された日英韓3言語による解説案内板。
2019年の写真では中央上部に多言語案内のためのQRコードが付いているが、
2018年にはなかった。

[4] 日本語（縦書き・常体）＋英語

⑥には厳原町教
育委員会名が記さ
れており、擬木を
使用している点で、
①や②に設置された
日英韓3言語による
案内板と前後して
設置されたものと
思われるが、この種
の案内板の中では
珍しく日英2言語の
みで記されている。



第6図 対馬藩お船江跡に設置された日英2言語による解説案内板

[5] 日本語（横書き・敬体）＋韓国語（横書き・敬体）＋英語

このタイプはデザイン的にも新しく、全島に広く設置されている。設置者名は書かれていないが、対馬市観光商工課によれば、同課が10年ほど前から設置・管理しているものだとのことである。中央に地図が記され日韓英の3言語がわきに添えられ、すべて横書きで、文体は日韓ともに敬体である。韓国にも常体と敬体の区別があるためソフトな印象となり、地図や写真の色合いとも相まって明るい印象を与えている。

⑨には2018年まで日本語のみの案内板が設置されていたが、2019年に横書きの日韓英3言語で書かれた比較的大きな案内板（第8図）に付け替えられた。雨森芳洲は江戸時代中期に朝鮮



第7図 和都美神社（⑫）前に設置された日韓英3言語による解説案内板

国との外交で活躍した日朝（日韓）友好交流の象徴のような人物であるにも関わらず、2018年までは対馬を訪問した韓国人が芳洲のことを知る機会がほとんどないのが実情だったが、現在それは解消されたことになる。

なお、最新の案内板は施設についてのみ解説したものではなく、対馬市が進めている「朝鮮通信使の街づくり」事業⁴⁾の一環とすることで、朝鮮通信使と雨森芳洲に関する説明が詳細に書き込まれている。通信使と芳洲の絵と共に中央を占める地図には関連地の場所がふりがなを付けた日本語で示され、それぞれ日本語のみの説明が付されている。このタイプの案内板は島内の朝鮮通信使ゆかりの地8カ所に既に設置されているという。



第8図 長寿院 (9) 前に設置しなおされた朝鮮通信使解説案内板の原稿 (対馬市提供)

[6] 日本語+韓国語（横書き・敬体）+英語+中国語

中国語まで含めた 4 か国語で解説された案内板も少数だが見られる。いずれの施設も見晴らしの良い展望施設だが、設置物の外形からして、設置者や設置時期が異なり、時期的には[5]より古いようだ。一時期、案内板に中国語を含めるトレンドがあったが、実際にインバウンド客の 99%が韓国人である以上、効率性の面から日英韓の 3 言語にするのが合理的だと判断されるというような経緯があったものと思われる。



第9図 美津島町が万関橋近くに設置した日韓英中4か国語による案内板

4. 案内板および韓国語解説文の課題

現在、対馬島内の観光施設に設置されている多言語案内板は過去数十年にわたり、時代と共に変化する需要にこたえて設置されたものであり、制作・設置者も設置目的も仕様も異なるものが混在している。1つの案内板を設置するには計画立案から設置まで多くの労力と期間、そして多額の予算がかかるため、必要度の高い場所から順次取り掛からなければならず、結果として全体的な統一性まで手が及ばないのが実情であろう。

当初は日本語で書かれた日本人向けの案内文を翻訳するところから始まり、次第に、背景知識のない一般の観光客向けには要点を整理した短い解説文が必要だという認識のもと、改善が行われてきたことが解説文から読み取ることができる（例：①⑥⑩）。ただ、同じ場所に2種類の案内板がある個所があるが、なぜ古いものを新しいものに付け替えるのではなく、以前のものを残してあるのかは不明である。その外形的な組み合わせに規則性があるわけでもなく、旧バージョンのほうが却ってわかりやすかったと思われる場合（例：⑬）や、旧バージョンにはあった歴史的背景に関する情報がそぎ落とされて味気なく感じられる場合（例：⑤）もある。一般に旧バージョンのほうが情報量が多いため、より詳しく知りたい人のために残してあるのかもしれないが、再設置の際に十分な検討が加えられていない印象がある。

なお、顕彰碑の類は、日韓両言語とも長く詳しい説明がなされているが、日本語から韓国語に翻訳したというより、両言語それぞれに必要な情報・表現を全体としてまとまりのある文章

に仕上げたと思われるものとなっており、長いけれども内容はよく伝わる。

次に、翻訳の問題であるが、英語だとわかりやすいのに韓国語だとわかりにくい場合があった(第2表)。これは、英語の場合、日本語から直訳しようとしても、語と語の関係や状況を補って訳さざるを得ないのに対し、韓国語は日本語からの直訳ができてしまうという言語構造上の類似性があったことになった結果だと言えよう。また、例えば対馬藩主「宗家」という語に対し「소가(宗家)」「소씨(宗氏)」「소가문(宗家門)」など何種類もの訳語が存在するなど、固有名詞や歴史文化的な専門用語を韓国語に訳す際に揺れがあったり、訳語処理の拙さを感じる場合がある。

そのほか、和多都美神社(⑫[5])の説明には、神話に登場する「彦火火出見尊(ひこほほでみのみこと)」「豊玉姫命(とよたまひめのみこと)」という神の名前が冒頭から立て続けに現れる。日本人であれば、よく分からないながらも、それが神の名前であり、どんな神なのか、およそ察しが付く。その部分の英訳文は、神の名前を訳出せず「ancestors of the Imperial Family」のように概念説明のみに留めている。音訳しても仕方がないからであろう。ところが、韓国語訳では名前の読み仮名をそのままハングルに置き換えただけで、漢字もなければ説明もない。これでは解説自体が意味を成さない。

異国の見える丘にある案内板(⑬[5])の場合、「防人」という言葉を発音どおりにハングルで記したあと、括弧をつけて「東北地方などから徴発され北九州の要地などを警備していた兵士」と説明しているが、韓国人にとって「東北地方」の指すものが日本人の考える「東北地方」と同じであるとは言えず、北九州と対馬の関係は自明なものではないため、これも説明の用を成していない。

そのほか翻訳者が日本語原文を十分に理解していないと思われる誤訳も見られる。金石城跡前に設置された案内板(②[3])の場合、日本語は長く詳しく解説してあるが、韓国語と英語は短く省略された解説となっている。ところが、韓国語では省略する部分を誤り、内容が歴史的事実と異なってしまっている。第2表がその例である。

これは、翻訳者個人の技量の問題もちろんあろうが、翻訳者に提供された日本語原文が明快とはいえなかった可能性があることと、完成した訳文へのチェック体制がうまく構築されていないことが原因なのではないだろうか。また、総体的に日本における韓国語翻訳分野の技術的蓄積やノウハウの共有が不足していることも課題であると思われ、今後はこれらの点を改善していくことが求められよう。

第2表 金石城前に設置された3言語案内板の内容（筆者の書き写し）

日本語	金石城は中世末から近世にかけて、宗氏の居館が置かれた城である。＜中略＞この地に居館が置かれたのは十六世紀のことで、発端は享禄元（一五二八）年に起きた一族の内紛であった。当時の居館であった池の屋形を焼失し、金石原の地に難を逃れた十四代宗盛賢（のちの将盛）が新たに建てたのが金石屋形である。 ここが体裁を整え、城となったのは、十七世紀後半のことであった。将盛が屋形を築いてから一三〇年ほどのち、第三代藩主宗義真の治世において城下に大火が相次いだ。ことに万治二（一六五九）年と寛文元（一六六一）年に起きた大火はすさまじく、町に甚大な被害を与えた。義真は幕府の援助を受けながら再興を期して大規模な町の整備に取り組み、好況の倭館貿易にも支えられて金石屋形の拡張と改修も行った。国分寺を金石原から現在地の天道茂に移して、城壁を整え櫓を建て、現在の城の体裁が完成した。こうして寛文五〜九（一六六九）年ごろにかけて整備された屋形は金石城と称され、対馬治世の拠点となった。
韓国語	가네이시성은 16 세기 이후 소(宗) 가문이 거주하였던 성이다. 내분으로 저택이 소실되자, 난을 벗어난 소모리카타(宗盛賢)는 가네이시하라에 가네이시저택을 짓는다. 소요시자네(宗義真)는 화염으로 큰 피해를 입은 마을을 정비함과 동시에 가네이시저택 수리에 착수한다. 고쿠분지틀이 동시키고, 성벽을 정비하고, 누문을 지었다. 간분 9(1669)년까지 공사가 진행되어 저택이 바로 가네이시성이다. (筆者訳: 金石城は 16 世紀以降, 宗氏が居住していた城である。内紛で居館が消失すると, 乱を逃れた宗盛賢は金石原に金石屋形を建てる。宗吉真は火災で大きな被害を受けた城下を整備するとともに, 金石屋形の修理に着手する。国分寺を移動させ, 城壁を整備し, 楼門を建てた。寛文 9 年まで工事が行われたこの屋形こそが金石城である。)
英語	Kaneishi-castle is where the So family resided from the 16th century. After the So clan's previous house was destroyed by fire during an internal struggle, So Morikata built Kaneishi House in kaneishibara., Later, So Yoshizane maintained the town after it was damaged by another large fire and started the repair of Kaneishi House at the same time. (筆者訳: 金石城は 16 世紀以後, 宗一族が暮らしたところである。内紛による火災で前の邸宅が破壊された後, 宗盛賢は金石原に金石屋形を建てた。その後, 別の大火災で城下が被害を被った後, 宗吉真は城下を整備すると同時に金石屋形の修理に取りかかった。)

5. 対馬ならではのアプローチを

2 章で述べたように、韓国人観光客がよく訪れる島内の主な観光施設には、おおむね韓国語を含む多言語解説案内板が設置されている。しかし、中には多言語案内の欠如により、その存在意義を発揮できていない可能性のある施設があることも事実である。

例えば、殿崎 (13) には日露戦争の日本海海戦にまつわる記念施設があり、対馬海峡で行われた海戦で負傷したロシア兵を対馬の地元民が救援し、手厚くもてなしたことや、日ロの友好と世界の平和を祈る施設であることが日本語でのみ書かれている。ところが日本語、ロシア語、韓国語で「対馬沖海戦ロシア兵上陸地 1905 年 5 月 28 日」とだけ書かれた看板が立っている。ここを訪れた韓国人が日露海戦勝利を誇示し讃える施設と取っても不思議ではない。もちろん、対馬観光物産協会発行の韓国語版ガイドマップにも簡単ながら解説はあるし、翻訳ソフトを使えば日本語による説明はわかるだろうから、全く趣旨が伝わらないわけではないが、やはり観光客に誤解を与えないような解説案内板は必要であろう。この場所が韓国人の団体ツアーに組

言するための道具で、日本ではあまり知られていないが、韓国では同じ機能をするものが「申聞鼓」といって、朝鮮時代に活用されており、歴史ドラマにもしばしば登場する、よく知られた道具である。現在も政府への苦言・進言を直接行うことのできる「国民申聞鼓」というサイトがあるほどである。「諫鼓」が韓国でいう「申聞鼓」に当たるという一言の説明があるだけで納得でき、文化的親近感につながる貴重なアイテムなのである。

観光庁（2014：23）は、「展示物等に外国の文化や歴史との接点があり、それに言及することが、訪日外国人旅行者が我が国の歴史・文化を正しく理解し、共感・理解を持つことに資する場合には、その文化・歴史についての説明を積極的に盛り込むものとする。」という指針を示している。私有地である万松院の敷地内が難しいならば、敷地外の案内板やパンフレットにでもいいので、この点に留意した記述があると有益だと考える。

一方、厳原の市街中心部に位置する八幡宮神社には、「警察官警戒場所」と韓国語で書かれた張り紙以外、すべての案内、解説は日本語である。この神社は古代から近代にかけての様々な対馬由来の人物が神として祭られた、極めて日本的な場所である。「三韓征伐」に出兵した神功皇后が祭られているという、韓国人にとってマイナスの側面があるため、多言語の案内がないのは神社独自の意図的な判断なのかもしれない。しかし、かといって何の説明もなければ、漢字を理解する人もいるため誤った解釈が横行することにもなりかねない。市街の中心に位置し、免税店や土産物店と隣接するため韓国人観光客も数多く立ち寄る場所である。日本人の精神文化に接するせっかくの機会を、適切な多言語解説によって生かすことはできないものだろうか。

対馬は、古来より朝鮮半島との関りが深いだけに、海外旅行を楽しもうと来島した韓国人に思わぬマイナスの印象を与えかねない要素をはらんでいる地域だとも言える。上述の神功皇后をはじめ、今回は触れなかったが白村江の戦い、元寇、倭寇、文禄・慶長の役、そして韓国併合前後の様々な歴史的イベントと関連する場所が、狭い島の中に数多く存在する。対馬ほどの密度ではないが、北部九州の多くの地域も同様の歴史的背景を抱えている。

観光とは日常から解放され、非日常を「楽しむ」ことが目的だから、できれば明るい側面を強調したほうがいいという考え方は否定しない。しかし、例えば日本人が韓国や中国を訪れた際に、意図せずしてネガティブな側面を見聞きしたとして、それが観光の楽しみや意義を損ねるだろうか。むしろ、現地を訪れたからこそ発見できた、ありのままの姿によって、より深い相互理解や視野の広がりをもたらすのではないだろうか。

世界のどの地域でも、他国と国境を接する地域には、隣国との交流の歴史と摩擦の歴史の痕跡が必ず残されているものである。しかし、プラスの側面もあればマイナスの側面もあるのが当然であり、それらを総体として互いに示し合い、体験し、理解し合うことが真の国際理解につながる。対馬は、韓国から近いからこそ、歴史的、文化的に深い関係を持っているからこそ

持っている資源を、より効果的に活用する方策をもう少し探ってもよいのではないだろうか。

6. まとめ

韓国人観光客が対馬を訪れ始めた 2000 年代は団体旅行が多く、韓国から添乗員として同行したガイドが韓国語で観光地を案内するのが一般的だった。しかし、SNS などの広がりにより個人旅行が増えた今日、訪問先の歴史・文化に関する情報は、インターネットからも得られはするが、現地ではまず韓国語解説案内板が最も大きな役割を果たす。今後はパネルに書かれたものだけでなく、QR コードを使った文字・音声ガイダンスなども拡大するだろうし、案内板のように費用と手間のかかる媒体でなく、紙媒体のパンフレットなどで補うことも可能だろうが、いずれにしても良質な多言語解説文が求められることに相違はない。

最も近い外国として気軽に対馬を訪れる韓国人に、対馬だからこそ得られる気づきや理解をもう一段階高めるためにも、韓国語解説案内板の改善を促したいものである。

謝辞

本研究は科学研究費（基礎研究（C）「隣接国間の相互理解に資する観光関連施設の多言語対応—北部九州における韓国語対応—」（課題番号：20K12446））の助成を受けたものです。

注

- 1) 韓国人向けのツアー広告、SNS のブログや YouTube で紹介されている観光施設をピックアップした。
- 2) 対馬野生動物保護センター、半井桃水館、峰町歴史民俗資料館などの展示館関係の案内板は、本稿では対象としなかった。
- 3) 「李王家宗伯爵家御結婚奉祝記念碑」は、1931 年宗家に嫁いだ朝鮮王朝最後の王の高宗の娘で、時代の荒波に翻弄された王女徳恵姫の苦難を偲ぶ碑、「大韓人崔益鉉先生殉国之碑」は朝鮮王朝末の気骨ある政治家で、反日を貫いたために対馬に幽閉され亡くなった崔益鉉を称えるもの、「朝鮮国訳官使殉難の碑」は 1703 年に朝鮮から派遣された朝鮮通信使一行 108 名が海難事故死した歴史的事件に思いを馳せ、日韓の友好を誓う碑である。
- 4) 2017 年「朝鮮通信使に関する記録」がユネスコ「世界の記憶」に登録されたことを前面に打ち出し、対馬の観光と街づくりを活性化しようとする事業。

参考文献

- 井上史雄 (2009) 「経済言語学からみた言語景観—過去と現在」『日本の言語景観』(庄司博史, P・バックハウス, F・クルマス編著) 三元社, 53-78
- 岩下明裕、花松泰倫 (2014) 『ブックレット・ボーダーズ No.1 国境の島・対馬の観光を創る』特別非営利活動法人国境地域研究センター
- 観光庁 (2014) 『観立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン』
- 金美善 (2009) 「言語景観における移民言語のあらわれかた—コリアンコミュニティの言語変容を事例に」『日本の言語景観』(庄司博史, P・バックハウス, F・クルマス編著) 三元社, 187-205
- 庄司博史 (2009) 「多言語化と言語景観—言語景観からなにがみえるか」『日本の言語景観』(庄司博史, P・バックハウス, F・クルマス編著) 三元社, 17-52
- 助重雄久 (2007) 「長崎県・対馬におけるインバウンド観光の展開と課題」海青社, 89-106
- 染谷裕子 (2009) 「言語景観の中の看板表記とその地域差—小田急線沿線の実態調査報告」『日本の言語景観』(庄司博史, P・バックハウス, F・クルマス編著) 三元社, 95-122
- ながさき地域政策研究所 (2019. 12. 27) 「『対馬観光再生ビジョン・提言書』を対馬市長に提出 <http://think-nagasaki.or.jp/news/detail.php?id=56>, 2020.9.30
- 中村八重 (2014) 「韓国から見た対馬観光」永留史彦ほか『対馬の交隣』交隣舎出版企画
- 松原一征 (2014) 「現代における韓国との交流の展開と課題」永留史彦ほか『対馬の交隣』交隣舎出版企画
- バックハウス, ペート (2009) 「日本の言語景観の行政的背景—東京を事例として」『日本の言語景観』(庄司博史, P・バックハウス, F・クルマス編著) 三元社, 145-170
- 本田弘之, 岩田一成, 倉林秀男 (2017) 『街の公共サインを点検する外国人にはどう見えるか』大修館書店
- 李炫姪 (2019) 「沖縄観光における韓国語の言語景観：他地域との比較調査から」『産業情報論集』15(1・2), 沖縄国際大学産業情報学部, 61-71

Current status and issues of Korean commentary on information boards for tourist facilities in Tsushima

HASEGAWA Yukiko

Keywords: Tsushima, inbound tourism, multilingual commentary, Korean language, understanding Japan

Tsushima is the closest foreign country to Koreans, and it is cheap and easy to come and go. For Tsushima, the Korean Peninsula is so historically related that it can be said that it is inseparable from ancient times. Due to its geographical and historical conditions, it is true that it has both bright and dark sides in its relationship with South Korea, but that is also a strength unique to Tsushima. One of the purposes of promoting international tourism is to promote understanding of Japan, and Tsushima plays a considerable role in that regard. This paper collected Korean commentary on the information boards of tourist facilities in Tsushima, which should play a role in promoting understanding of Koreans toward Japan, and examined issues and improvement measures regarding the contents and installation status.

(九州産業大学)

長谷川 由起子